

氏名	岩田純一 いわ た じゅん いち
学位の種類	教育学博士
学位記番号	論教博第35号
学位授与の日付	昭和60年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	語の意味習得からみた概念発達に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 梅本堯夫 教授 河合隼雄 教授 坂野 登

### 論文内容の要旨

本論文は幼児期から児童期における語の意味習得の発達過程について実証的な検討を多角的に行い、それによって概念の発達を研究したものである。論文は、類概念及び範疇語の意味発達に関する研究と、空間的な量概念とそのことばの発達に関する研究から構成されている。

まず類概念と範疇語の意味発達をさまざまな水準で捉えるため、6種類の調査、実験が行われた。すなわち、水準1として、“もの”と“もの”の系をとりあげ、“もの”の自発的な分類行動を通して概念の発達を見ようとし、水準2では“もの”と“ことば”の系に焦点をあて、与えられた範疇名に基づいて“もの”の集合をつくったり、つくられた集合に対して適切な範疇名を述べる行動をとりあげ、水準3では“ことば”と“ことば”の系に焦点をあてて、範疇語から下位事例を想起させたり、範疇語を定義させるという方法で研究を行った。

具体的には、まず予備調査として、範疇語に対する連想基準の作成から出発し、都市（東京）と離島（甌島）において、3歳から小学4年生までの被験児1136名について、動物、植物、野菜など14の範疇語に対する連想反応を調査した。その結果、年少児から小学4年まで、出現頻度の上位の項目には高い共通性が見られた。また年少児では各範疇への平均連想数そのものが少なく、特に3歳児では無反応や不適切な反応が多かった。

実験としては、まず仲間づくりテスト (odddity problem) を実施し、[うさぎ、いぬ、にんじん] など3語からなる12組の絵単語について、分類とその理由づけをさせた。その結果、抽象的な等価関係をもつ絵同士を仲間とする反応は年齢とともに増加すること、また、理由づけでは、年少児において多い独断的、感情的な理由づけが、しだいに機能的、名義的な等価関係による理由づけに変わることなどを見いだした。また再分類させた場合における分類原理の転換能力は年齢とともに上昇するが、年少児では最初分類原理への固執傾向の強いことが見いだされた。

つぎに33枚の絵単語をもちいて自由分類と範疇語理解テストが行われた。その結果、正しい分類反応数は年齢とともに増加したが、特に4歳から5歳にかけての伸びが著しく、5歳から6歳にかけては停滞

がみられた。ついで範疇名を指定してその外延カードを選択させるテストを行ったが、その成績は自由分類テストの成績よりも優れ、各範疇ごとの難易性には両テスト間に相関がみられた。つぎに分類すべき概念の数を指定した制限分類テスト、および、より包括的で少数の範疇への再分類（垂直分類）や相補的な再分類、および交差分類などのテストを行ったが、その結果も同様に年齢とともに正分類者率の上昇がみられた。しかし分類の言語的説明能力は分類能力よりも遅れて発達し、自発的な分類反応のみられない時に実験者が模範分類を示して理由づけをさせた場合でも5歳になるまでは適切な反応はほとんどみられなかった。ついで「とんぼは動物ですか？」のように範疇関係の質問調査を行ったが、その結果は範疇語に対する連想調査の結果と対応がみられた。また特に4歳児と5歳児について、それぞれ〔すずめ、つばめ、あひる〕など3～9個の対象が描かれている20の図版を見せてその範疇名を言わせた呼称テストの結果は、花、けもの、鳥、野菜、乗り物、などのいわゆる基礎水準にある範疇への反応は、動物、植物、道具などの上位水準の範疇への反応よりも容易であった。包括的な上位水準名の使用は4歳児でも難しく、そのためそれらを上位範疇に包摂される下位範疇に分割し、それぞれ列挙する反応が特徴的にみられたが、5歳児になると逆に無反応が著しく増加することがみられ、これは5歳児において概括化への態度や意識が強くなるにもかかわらず、まだ包括的な上位範疇名を使えないために生ずると解釈された。つぎに定義テストを実施したが、その結果を全体としてみると概念的には、個人的、特殊的な経験に基づくものから、社会的、抽象的なものへと発達し、統辞論的には、個人的な実際経験をのべる定義から辞書的で慣用的な言語定式の形でのべる定義へと発達することがわかった。最後に概括化能力の発達の契機となるような経験の役割を検討するため、自由分類を前後二回させて、その間に挿入課題を分類させ、できない場合には模範分類をみせて、その効果をみた。その結果、挿入経験効果のみられたのは4歳後半から5歳にかけてであり、ここに概念発達上の質的な転換点があると考えられた。

後半では、空間的な量を表わす概念とことばの発達を、特に次元分化という観点から研究した5実験が報告されている。まず大小、多少、高低、長短、深淺、厚薄、広狭などの次元について、自発発語、誘導発語、認知理解の順にテストを行った。その結果、次元の獲得においては、大きさ、多さ、長さ、太さ、深さ、高さ、厚さ、広さの順序がみられた。次元内では、一般的に有標語より無標語のほうがより早く獲得されるが、太さでは逆の結果がみられた。つぎに、長くて細い鉛筆と短くて太い鉛筆などを用いて、2次元の比較テストを行ったが、自発発語、誘導発語ともに単一次元の場合より難しく、急激な発達のみられたのは小学3年から4年にかけてであった。つぎに、棒の系列化課題、円の群性描画課題、矩形描画課題などよりなる系列化操作テストを行ったが、いずれも4歳から5歳にかけて急激な伸びを示した。逆に長さの順に並んでいる5本あるいは3本の棒をみせて系列の言語表現をさせたテストでも4歳から5歳にかけて分化的、統語的表現が増加した。また3歳では大小の2分割的な叙述しかできないが、4歳から5歳にかけて大中小の3分割的表現の急激な増加がみられた。最後に意味の相対的理解をみるために、13の単一次元について系列的に変化する対象を描いた各5枚ずつのカードをもちい、大小次元で系列化された絵カードに他の次元カードを系列的に対応づける系列性理解テストが行われた。その結果、次元による難易度の差は2、3歳で大きいことがみられ、このことから、次元を超えた極性の理解が発達的につねに先行するものではなく、系列化のような複雑な操作課題では初期の段階でも次元性がかかわってくることを示唆された。

以上のように範疇語および次元形容詞の意味発達に関する横断的な調査や実験によって概念発達の諸相を明らかにしたが、その結果から、概念発達には、3歳から4歳にかけての概念形成および課題性意識の形成、4歳から5歳にかけての思考や概念を言語定式化する能力およびメタ言語的能力の形成、小学3年から4年にかけての抽象的、論理的概念システムの言語化能力の形成など、三つの大きな質的転換点のあることが指摘され、なかでも4歳から5歳にかけての質的転換の重要な意味が強調された。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、幼児期から児童期にかけての概念の発達を、諸種の範疇語および空間的な量を表わす次元形容詞の意味の習得を研究することによって明らかにしたものである。そのため3歳児から小学4年生までの千名をこす被験者について、多くの校調査や実験を行い、この問題をさまざまな角度から分析した。具体的には、範疇語については、仲間づくりテスト、自由分類、制限分類、範疇語連想、範疇名呼称、範疇語理解、意味定義、分類経験効果など、次元形容詞については、単一次元比較、二次元比較、系列化操作、系列の言語表現、系列対応操作などの問題を、順次とりあげて調査や実験により研究した。これらの研究において、とりあげられた問題や、実験よりえられた結果の考察においては、最近の言語心理学や発達心理学との関連がたえず考慮され、解釈された。従ってたとえば Rosch らの自然概念の研究により展開された基礎水準の問題や、有標無標語 marked unmarked の問題、Sinclair らによる次元形容詞の意味獲得と概念発達の関連の問題などもこの研究でとりあげられている。そして結論として概念発達に三つの質的転換のあることを指摘し、特に4歳から5歳にかけての転換点の重要な意味を強調した。

この研究の結論の一般性についてはなお今後の検討をまたねばならないが、言語発達と概念発達の関係に関する研究の今後の発展に対してこの研究のもつ意義は大きい。

よって本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。

また、昭和59年11月27日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。